

は目を見張る思いがした。会議は全体会が5本の基調講演、分科会（ワークショップ）が22本組まれていた。筆者は、ワークショップを「学校精神衛生」に限定して出た。この帰朝報告は、日本心理学会大会期間中のアーベント『文化と人間の会』（56. 9）と名大教育学部の臨床リサーチ会議（56. 10）にて行なった。

7. その他の活動など。

「アンビバレンス」他28項目（石部元雄・伊藤隆二他編『心身障害辞典』福村出版、56. 4）

「瀬戸内・周防大島におけるイワシ網漁の集団にみられた子ども・老人・女性・男性の役割と体験について」（第7回コミュニティ心理学シンポジウム・博多会議。口頭発表、57. 3）

「人格」（日本教育心理学会編『教育心理学年報』第21集、1981年度、91頁。57. 3）

「推薦入学制度の功罪をめぐって——筑波大学での学生相談会議に出席しての報告」（名大学生相談室報第12号、57. 3）

研究経過報告

若林 満

1. 研究活動と学会報告

本研究室を中心に2つの共同研究が一昨年度から進行している。その1つは女子短大生の職業自己像の形成に関する研究で、「力強さの自己イメージ」尺度と、大学生活への適応、性役割タイプ、職業選択との関係が追求された。共同研究者である後藤宗理・鹿内啓子先生と相談し、この研究を縦断研究に移行させるべく目下検討中である。この研究活動の成果は、日本心理学会第46回大会と東海心理学会第31回大会で発表された。第2の研究は、愛知県婦人労働サービスセンターの委嘱を受け、職場適応研究会を中心に婦人の職場適応問題について調査を行なうものである。昨年度は婦人管理・監督職のキャリア形成の条件について、富安玲子・湯川隆子先生や職場の代表委員と研究を進め、これら婦人における職業自我同一性、キャリア促進要因・阻害要因、職業と家庭との両立問題などについて調査がなされた。この研究の結果は、同じく日本心理学会と東海心理学会において発表された。なお上記研究の一部として、約30名の婦人役職者を対象とした面接調査が行なわれたが、その結果は現在分析中である。本年度は婦人の処遇問題が研究テーマとして予定されている。

2. 執筆活動

女子学生の職業自己像に関する研究は、鹿内啓子・後藤宗理先生との共同論文として本紀要にまとめられている。また、上記研究の発展としての保母と看護婦における職業自己像の形成過程の横断的分析結果は、やはり共同論文として本紀要に掲載された。働く婦人に関する調査の結果は、富安玲子・湯川隆子先生と共同で、「婦人の管理・監督職に関する調査—地位形成の条件」と題する報告書（愛知県婦人労働サービスセンター刊）としてまとめあげた。昨年度は「組織の行動科学」（西田耕三・若林満・岡田和秀編、有斐閣）が刊行され、その中で3つの章の執筆を担当した。また、「組織メンバーの動機づけ」（関本昌秀編、組織と人間行動、第6章、泉文堂）、「満足と行動」および「キャリア開発と組織開発」（二村敏子編、組織の中の人間行動、6章と11章、有斐閣）と題する分担執筆にも参加した。以前の共同研究をまとめる形で、「慶応方式による管理能力アセスメント」（労務行政研究所、管理職の登用・選択手法、71~91）を、佐野勝男・榎田仁先生との共同論文として発表した。現在「経営の心理」（佐野守・若林満編、福村出版）が進行しているが、その中で2つの章を佐野守先生と共同で分担した。また現在刊行中の「経営行動科学辞典」では13項目の執筆を担当した。